

長崎県における地域デジタルアーカイブの可能性と課題

木村 直樹^{1,a)}

概要: 現在, 日本社会全体において, デジタルアーカイブの構築が進められている。デジタルアーカイブは, それを通じて, 研究基盤の共有化がなされ, また, 遠隔地のアーカイブとの比較研究を可能にするなど, 多くの成果を上げてきたことは言を俟たない。しかし, 一方で, デジタルアーカイブを推進する上で, 地域社会にとって, いくつかの問題点も顕在化してきている。特に, 大量のアーカイブが生成されるようになる日本近世社会では, その生成や伝来の在り方が, 当時の社会の状況に規定されている。現在の長崎県下のように, 複数のアーカイブ作成機関が並立した状況が, 近代になっても克服されずにいることは, 今なお, 大きな課題として残されている。本報告では, 現在の長崎県下のアーカイブの可能性について, 報告をしたい。

キーワード: デジタルアーカイブ, 日本近世史, 長崎県

Possibilities and Challenges of Regional Digital Archives in Nagasaki Prefecture

NAOKI KIMURA^{1,a)}

Abstract: Currently, in the entire Japanese society, building digital archives has been promoted. There are a lot of achievements by digital archives, since digital archives have been accomplishing the sharing of research infrastructures, and enable a comparative studies of the archives among remote locations. On the other hand, in order to promote the digital archive, a number of problems have been risen for local communities. In particular, in early modern society of Japan a large amount of the archive was generated. The methods of the generating and the introduction of the archives was defined in the situation at the time of the society. As under the current Nagasaki Prefecture, a situation in which more than one institutes who create archives are parallel has not been overcome in the modern. It remains a major challenge. In the paper we describe the possibility of the archive of the under current of Nagasaki Prefecture.

Keywords: digital archive, early modern history of Japan, Nagasaki Prefecture

1. はじめに

近年, デジタルアーカイブの構築が進み, 日本史研究も, その恩恵をあずかってきた。特に, 国立公文書館や東京大学史料編さん所の提供するデジタルアーカイブ^{*1} は, 史料

の画像提供も行い, 東京以外の日本史研究者にとって, 研究を行う上では, 主要な史料をデジタル画像として閲覧することができるようになり, 研究の質的向上に資してきた。

ところが, 基礎的な史料や著名な史料は, 基本を押さえる史料としては重要だが, 実際の研究においては, 上記の主要な史料所蔵機関所蔵史料で事足りるわけではない。

重要なことは, 地方各地に所在するアーカイブをいかにして, デジタル化し, それを利用できるようにするのか, 整備することにある。

特に, 地方の歴史研究を活性化するには, 現在は, 現地の研究者のみならず, 大都市圏の大学で研究をする若手研

¹ 長崎大学多文化社会学部
School of Humanities and Social Sciences Nagasaki University

^{a)} n-kimura@nagasaki-u.ac.jp

^{*1} 国立公文書館デジタルアーカイブ
<https://www.digital.archives.go.jp> や東京大学史料編さん所データベース群 <http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>

究者の存在が欠かせない。もともと戦後の地方史研究の担い手は現地の大学・博物館関係者以外に、中学校・高等学校の社会科教員が主要な担い手であったが、現在は、教育現場の繁忙化により不可能な状況にあるからである。そこで、本報告では、長崎県を事例に、デジタルアーカイブ化にどのような問題点があるのか、概要をしめしてみたい。

2. 前近代の古文書の分類

前近代における古文書は、数少ない古代や中世の古文書を除いて、17世紀以降、爆発的に増大し、今日に伝来している。したがって、デジタルアーカイブの対象となるのは、近世および近世社会の仕組みがある程度継続している明治時代あたりまでの史料が中心となる。

これらの文書を主な分類をすると次のようになる。^{*2}

前近代における古文書は、数少ない古代や中世の古文書を除いて、17世紀以降、爆発的に増大し、今日に伝来している。したがって、デジタルアーカイブの対象となるのは、近世および近世社会の仕組みがある程度継続している明治時代あたりまでの史料が中心となる。これらの文書を主な分類をすると次のようになる。

① 大名家文書

—1 御手許文書

書状類が多く、明治以後華族の手元に多くが残る

—2 藩庁文書

今日の行政文書に相当し、明治以後、地元の自治体継承されることが多い。

—3 各武家の文書

家の文書であるが、請負型の行政も展開するので、公的意味合いの強い文書も含まれる。

② 地方（じかた）文書

—1 村文書

村政は自治の側面があるので、集約される

—2 私的な家文書

ただし、世襲の村の庄屋などに村政の文書が蓄積が蓄積されることもあり、必ずしも明確に分類できず、伝来も一体的になっていることが多い。

③ 町方文

—1 町文書

町の運営に関する文書

—2 団体文書

様々な同業組合などの文書

—3 私的な家文書

商家の経営などもこちらに含まれる。

^{*2} 日本歴史学会編『概説古文書学 近世編』（吉川弘文館、1989年）などを参照。

文書は、それぞれの文書の作成団体によって作成の手法が異なり、それ故に、ひとつのフォーマットにすることは極めて困難。（一点ごとのアイテムであれば何とかできるが、群や fond として理解し、デジタルアーカイブにするには、元秩序の構造理解が欠かせない。

3. 長崎県下の残存状況

残存状況

① 八つの支配体制（幕府直轄都市長崎・幕領長崎農村部・島原藩・大村藩・平戸藩・五島藩・対馬藩・佐賀藩飛び地）

② 県内に残らない古文書

- 対馬藩：韓国も含め7カ所に分散
- 佐賀藩飛び地：佐賀県に主要文書が存在
- 長崎の町人文書（近代以後長崎を離れる者が多い）

③ 異なるもともとの文書作成システム

- 織豊型大名家（島原）
- 旧領居付大名（対馬・大村・五島）

特に、藩政機構と家老などの藩士文書とが、職掌分離が厳密でないため、旧領居付型大名家では、大名家の文書を読み解くことで藩政理解が完結しない。近代になって、一部の藩政文書は長崎県に引き継がれるが、多くの史料は各地に分散したまま。

地方の状況をまとめて理解可能な、熊本藩・岡山藩や尾張藩とは異なる状況。県ないしそれに準じる領域を支配していた場合、そのまま近代的行政文書へと移行してくる。

4. 課題

① 多種多様な編成原理による文書をどのように、デジタルアーカイブで表現するのか

② 所蔵場所が多く、現代に作成された史料1点ごとの目録の編成もまったく異なる状況（各項目の名称すら異なっている）

③ デジタルアーカイブを公開する機関

- 長崎歴史文化博物館
最近、長崎県所蔵と長崎市所蔵の史料のDBの一本化に成功
- 長崎県立対馬歴史民俗資料館
これから改装予定
- 長崎ミュージアムネットワーク
HPや各所蔵機関の一番著名な史料などについては、わかるが、全容がわかるわけではない
- 長崎県立長崎図書館
移転予定、歴史的史料は長崎歴史文化博物館に移譲

したが、書籍などが残っている

- 長崎大学附属図書館
所蔵する古写真は日本でも指折りのコレクションであるので、古写真の DB があるが、必ずしも専門的ではない
- その他博物館

④ 県外史料

例えば、佐賀県立図書館寄託鍋島文庫